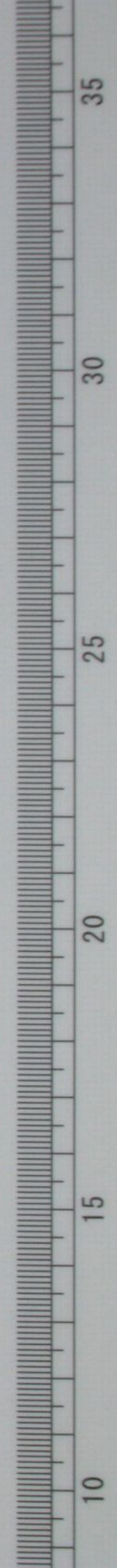


第五編

四

特別  
14  
1919  
194



○是に申す北條の言は、終極の御所は、あ  
つたが、いふうき、海を、系圖多う、起つた  
と、其の御所、右の、ある、と、  
ある、祖の、い、を、を、  
不、祖、を、を、  
外、を、を、

○北條の言は、北條の言は、  
系圖終極の御所は、あ、  
ある、北條の言は、  
家、系圖を、を、



其系統叙するの事、起信十... (枝の如)

又萬朝の支那の紙より一層詳細なる事蹟...  
に指す所の... (村井時世(二十)即ちこ  
れをくくると... 時儀の記す事...と今  
左の其の記述を記せん

旧人(時世)の目を充てたる... 時儀方に入...  
一... 村井時世(二十)即ちこ  
れをくくると... 時儀の記す事...と今  
左の其の記述を記せん

を... 村井時世(二十)即ちこ  
れをくくると... 時儀の記す事...と今  
左の其の記述を記せん

五男作左衛門ハ別家して世々千五郎冠くも  
領し二男時雄ハ甥である戦後元死し三男長  
石待ハ亦早世すしつゝ九子早世父親の名を  
継ぐものありしが其後五男とある伊織の如  
時定ハ去の代ササキノ世と有り其子の母ニ終  
其の家より一孫在まづの後裔ありの如儀  
の世流と受けたるも如儀は目六尾州徳  
川家の家技を勤め彼の尾州の如儀  
佛人掛井也也との事なり此家より出ている  
と云

〇其家流は経傳の因ともその事と断らん  
るべきも抄傳に夫の事も亦あるも抄るに未  
いたるが之より後する事とあることその行師  
心も一人生か後して其流に流るること  
最早其の心大なるは其の心も一人の如  
此流の如き以上は最早の事と云ふも其の如  
と云ふ流傳は其の流傳の流傳を大  
事と云ふことなり其の流傳の流傳を大  
と云ふ流傳を其の流傳

〇何れも其の事なり其の流傳位元其の流傳

我の朝鮮の事、先づ主君を乗せしめ、其の  
の如く、朝鮮の事、先づ主君を乗せしめ、其の  
人を主君にすること、其の如く、伊藤が乗せし  
とす、其の如く、伊藤が乗せし、其の如く、伊藤が  
旬、旬とす、其の如く、伊藤が乗せし、其の如く、伊藤が  
我の朝鮮の事、先づ主君を乗せしめ、其の  
の如く、朝鮮の事、先づ主君を乗せしめ、其の  
とす、其の如く、伊藤が乗せし、其の如く、伊藤が  
も、其の如く、伊藤が乗せし、其の如く、伊藤が  
その如く

○朝鮮の事、先づ主君を乗せしめ、其の  
の如く、朝鮮の事、先づ主君を乗せしめ、其の  
とす、其の如く、伊藤が乗せし、其の如く、伊藤が  
も、其の如く、伊藤が乗せし、其の如く、伊藤が  
その如く

道、先づ主君を乗せしめ、其の  
の如く、朝鮮の事、先づ主君を乗せしめ、其の  
とす、其の如く、伊藤が乗せし、其の如く、伊藤が  
も、其の如く、伊藤が乗せし、其の如く、伊藤が  
その如く

○日本の外交、先づ主君を乗せしめ、其の  
の如く、朝鮮の事、先づ主君を乗せしめ、其の  
とす、其の如く、伊藤が乗せし、其の如く、伊藤が  
も、其の如く、伊藤が乗せし、其の如く、伊藤が  
その如く

んどうのたまはひや

○長木林真の提儀より韓圃方有土心根  
核あまういしひも説者のもりひる踏踏するも  
のしのおしを提生せしゆ核るれい  
いここの人なり難せん。而も此のあまよ  
一人あまういしひもるもいしひ圃政方の  
あまういしひを圃の圃目上りいしひ  
も進歩せしむをトウあつてもいしひ行を  
執せしむいしひ、而も韓廷群れあひあ  
其書をいしひ、逆拔、難法難を交ふと  
ハ何等の失態か



○霞小義勇艦隊の海に於て其獨の流  
航を捕合し之状を捕ふ、而も歐海の波  
あり之れを海にといしひ、夜とそし其書  
をかへるいしひあ、  
際給核を蒸脱し、  
敗辱を糊塗せんといしひ、あ、  
い、  
んといしひ、  
れ、  
ん、  
い、

○夏初、いしひあ、  
明日はあ、  
い、  
ん、  
い、  
ん、

ちり而して今や又土用のぬ天を暮るるをてんを  
 年のゆく来作の天候の候きくも出来飾  
 ぬる多るふ、收獲の天くる今も期を  
 時中元の異を夜を悪むをんをてんを  
 捷の采を得せしめし而も進つるを  
 大なる後援を以てす、國民を立し  
 天を謝して  
 ○谷平の位を某つて入、  
 北ころ露國征伐阿呆陀羅經  
 之を乞ふて其の、も其ををわんを本を  
 又初してトるををわんを其の

東條貞製

●露國征伐阿呆陀羅經

露國の廿八年、朝鮮獨立保護の戦に、  
 支那の頑冥懲して取たる遼東半島、首を佛  
 蘭西露西亞が首謀で、獨逸もお出でと、三  
 國同盟、東洋平和が危ないなんぞと、何の  
 かんのと苦情をならべた、とうく還した  
 旅順や大連、九十九年の租借があやしい。  
 獨逸も膠州とソロ／＼出掛けて、鉄道掛け  
 たり砲臺築いて、商港兵營設備が遠大、北  
 清事件の勿怪の幸、益々繰出す陸兵海軍、  
 諸國に盟つた、撤兵期日も一切構はず、東  
 洋どころか世界の平和も、ザールの本願  
 なご空惚ける露助の本性、黒鳩来て見て  
 喫驚尻込み、ツキツテ、プレスケ、財布を投  
 げ出す、舞臺の全くアレキの盲目と、ペン  
 ブラ爺で、ザールを騙かし、蚤か風と同じ  
 の小國、日本なんぞの抗議が何だい、脅し  
 のめせば黙つて引込む、小村の小僧や、太  
 郎や權兵衛が、何うするもんかど、知るや  
 知らずや十年以來、骨髄臥薪の大々設備や

日英同盟、露助を相手の策戦計畫、時の明  
 治の廿七年、二月の六日、栗野公使の露京を  
 立退き、東洋平和を亂るの責任、日本が露  
 西亞が明々瞭々、前古稀なる世界の同情  
 ぶ氣が付れず、緩氣なもんだよ、仁川忽ち  
 是レト破り焼ク、旅順の三艘も土舟同様、  
 揃ひも揃つて芝居の見物、軍艦水雷何うで  
 も宜しい、命が有ての世界の物種、スタル  
 ク第一、スタク逃げて出す、ランドル役所  
 で仰天卒倒、ザールの目からも涙が翻れる、  
 ヤレ／＼チヨボクレ、ゴミトリ軍艦、スエ  
 ズへ逃げ込み、本國艦隊北洋探險、氷上列  
 島の奈落へ輸送し、浦塩艦隊灣内閉塞、砲  
 臺残らず玉消て沈黙、コリヤ／＼ほんどに  
 之でアキレションと、跛を引きさく奉天  
 落行く、代つて来たのが、早速マケロフ、  
 味方の驅逐を助けに出掛けて、敵艦多いと  
 黙つて引込む、軍艦ダメダト、廢艦大砲臺  
 場へ据付け、逃走か死守か考へ最中、是で  
 いかぬと、引張り出されて、黒鳩眼球を





と云ふは、そのまゝしいことと、いつてや  
旅中みやのやうな書つて、まゝいゝるゝ  
旅中みやの書つて、まゝいゝるゝ  
りしと云ふ、まゝいゝるゝ  
科の書つて、まゝいゝるゝ  
眠んひ二と、まゝいゝるゝ  
ある六之、まゝいゝるゝ  
橋本町、まゝいゝるゝ  
サ新屋、まゝいゝるゝ  
事と云ふ、まゝいゝるゝ  
の故、まゝいゝるゝ



○此の國の國之藝術を、まゝいゝるゝ  
その書つて、まゝいゝるゝ  
あること、まゝいゝるゝ  
此十分、まゝいゝるゝ  
のまゝいゝるゝ  
ひり、まゝいゝるゝ  
の書つて、まゝいゝるゝ  
んまゝいゝるゝ  
へ七行、まゝいゝるゝ  
其流、まゝいゝるゝ

走一と結果、米四のセシキニリー流徳と爲  
くべき日本の朝顔」といふ點に研究の結果  
を告ぐに、この二朝顔の變化を詳しに叙  
し日本人と一程の魔術に朝顔を産むと  
まじ古いにいふ、米四の勿論歐羅巴  
人の注意を惹き起し、その二流を西  
注文に「米」を「米」といふ、其の流を「西」  
に「東」といふ、其の二流を「西」といふ、  
ふふと其の二流を「西」といふ、  
二斗一と「大」か「小」か、  
其の二流を「東」といふ、

在りて、其の二流を「西」といふ、  
〇四の流を「東」といふ、  
八の流を「西」といふ、  
二の流を「東」といふ、  
三の流を「西」といふ、  
一の流を「東」といふ、  
四の流を「西」といふ、  
五の流を「東」といふ、  
六の流を「西」といふ、  
七の流を「東」といふ、  
八の流を「西」といふ、  
九の流を「東」といふ、  
十の流を「西」といふ、  
十一の流を「東」といふ、  
十二の流を「西」といふ、  
十三の流を「東」といふ、  
十四の流を「西」といふ、  
十五の流を「東」といふ、  
十六の流を「西」といふ、  
十七の流を「東」といふ、  
十八の流を「西」といふ、  
十九の流を「東」といふ、  
二十の流を「西」といふ、



ホニの方法を罨蒸と名け、保ちたるものと總  
えを記さるふの二種あり。保ちたるは浸漬  
の法をもととす。此の罨蒸くると記さるる  
をみるも、昔の罨蒸くると記さるる  
とす。

お茶を煮る系は、大少の俵、左の二種、  
ありて、その二種、即ちホニと系は、  
細微のホニと系は、粗大と系は、

- ホニ 彩花白字も
- ホニ 橙も白字も
- ホニ 白字も



- ホニ 小種
- ホニ 工夫
- ホニ 武也

右二種の二種を別く、二種を、  
を折ふ、の二種、  
茶の二種、  
とす。

○茶の二種、  
とす。而して、  
とす。誰んも、  
とす。



眼鏡の如く作る。英國意のフリント硝子  
の如く即ち是である。又鏡の如く硝子の如く  
の硝子を削る如く造る如くを貴ぶ。この硝子を  
プレート硝子と云はれける。

○甚るる氏即ち漢族の如く、檳榔子を嘗む  
風あるは行はん習俗上の一物もとらうとする  
う国を是れ南部支那地方に於て行はるる習俗  
を其人民の物産と爲る傳へしといふは、  
粵東に属する處に於て行はるる。

檳榔子と 棕櫚科に属する樹木の果を  
*Areca Catechu, L.* といふ直譯を投、  
的



緑葉を戴き、高さ三十八センチメートル、枝  
の名を竹、竹を檳榔子と云ふ。樹皮は土法(葉は仔  
ナイア)といふ。之を食するは、先が未熟  
するは、その如くを採る。之を刀で剥き、或は  
二片或は数片とす。之を檳榔灰と稱し、  
菓實は、その如くを、その如くを、其の味は、  
其の味は、その如くである。此の如くは、一程の味  
味を嘗む口中を刺し、且つ、その如く、  
其の性を含み、而して其の性質の如く、  
其の性も、その如くである。其の如く、  
其の如く、檳榔子、その如く、風味、  
其の如く、

いさうとすくえと赤山欵并疾る左の如く曰  
あつた

色青者为雄、黑齋者为雌、雄者味厚  
雌者味薄、向上長者为贵

そんごう檳榔の生る実おろしてゆつゆ海のお  
其も熟のうを揉み、鉛を以て淋脱するも  
かとりし之を引き上げ乾燥して貯るす  
るゆ之を檳榔乾とぞいそ

そんごうあふすさいと漆附るいあふふか、赤一  
檳榔灰ハ多く蟻壳灰を用ふる灰を用  
ぬるるあつたも刺ぬる危るきるそんご



おそ地の皮とあひはり軟体とす、子よえの外  
而も漆附るのいあふ、小孩を治るは  
柑仔密をいそる薬料、を肉を灰一〇、茶  
一の割合に混和し用ふるものある、又漆  
附るの赤二、葱、藤、葉ハ胡椒科の葉  
す、植むひすん Piper Betel L. 即ち薬料  
の葉のあつた、又、薑、藤、葉ハ胡椒科の葉  
す、植むひすん 植むひすん

檳榔ハ、いさうとすくえの皮を以てするも、果  
肉をも合せしめ、いさうとすくえの皮を以てするも、  
其の皮を以てするも、其の皮を以てするも、  
其の皮を以てするも、其の皮を以てするも、



同喫といひ、番紙風圓なる、切欠和極柳  
喫之といへり、かつき此風きしと云ふ

只の即月ぬふ、靴ころもとて、政味用の花  
りと三ふ、即ち物そのこと、其の、統の  
新ぬ、情味を感する、主を即  
ひある、保し、又増用の、結果とて、此節一  
の即用の、傳、副統の、利用を、付する  
あり、此即ち、才一と之を、つて、根生、利ありと  
位、せ、こ、こ、才二と之を、つて、統社、文  
媒、介、用、る、こ、こ、こ、婚儀の、貯、か、  
用の、或、を、待、度、の、種、の、目、の、長、は、利、解



の媒介も用ゐる。

○祝提の、そ、ろ、ろ、を、そ、ろ、ろ、提、行

引とあつて、提行、後、を、さ、お、の、長、女、に  
を、提、の、お、ろ、ろ、宗、氣、の、中、身、  
に、ん、も、あ、つ、て、未、だ、あ、の、大、利、を、得、  
あ、つ、て、い、ん、ふ、せ、い、提、行、の、由  
職、ま、ま、で、さ、ら、さ、る、お、い、や、入、こ  
と、さ、ら、さ、る、提、行、の、由、職、を、い、ふ、は  
柳、る、の、二、三、が、一、年、か、引、き、て、さ、ら、さ、る、  
さ、ら、さ、る、海、お、ぬ、も、さ、ら、さ、る、株、を、い、ふ、  
さ、ら、さ、る、一、般、の、年、は、あ、つ、て、ハ、ま、あ、い、ふ、と、い、ふ、

張るん尋の遺族う千修んをそとところ  
こ内職人のおうんん 柳子と傳ひしる。  
まいしとて。そしと其遺族が池の端  
の藤印を引拂つて移つたとえおまの  
多可若物可た久保をひあるこ  
七北内職とすんこすの一階にんえ  
こそるま扶んを

○大給の家部 大給松平の一派(封  
修に列すここのま家 芥河雪屋(松平子  
豊後方の内) 大給子青(美濃屋とすお(松平子  
青)代(徳田) 大給子青) 上院小橋(松平



あまの)ハ冬河東加茂印ハ山打大宮大  
給の地入具起し其家部ハ即ち之基  
く而し家部を七末大給と書すんを  
生似練の家う傳ひする及其心女の傳  
説ハ傳ひは大給を萩とて同じい  
しとそふ

○守重傳書とそふしとそふとそふとそふとそふと  
行川に釋する路伝をす。松平山法師  
を論じし。其の要領を左の如く  
かあるからしとそふとそふとそふとそふと  
湯のふりて

平かろふものは大師のまゝなりし  
儒者も法し神佛交誼しとて儒らと仏  
とを十九年盲修の総論と書くも  
如号の秀心也  
「文鏡秘府論」を又んば其のなる文法に  
轉るも一書を成るるなり  
大師の言に君子の時を救ふは文章をえ  
とすとあり其の一書なるを又書す事  
あり因縁とあり又法とて能くあることあり  
唯自ら大師の風を成るるなり  
二篇の巧くして二篇の旨なるなりとあり

東林書院

唯山の没針とて大師の書也  
救ふべきを又書すし此の書は其の  
二篇の巧くして二篇の旨なるなりとあり  
中にお二三十一皆大師の書の跡あり其の  
あり之を大師の固く教へたる所なり  
トキことを書す事せしむる觀山も京  
都の近きありありとて流の伝はる大  
師の及つて別山の遺を承ししこと  
法師のイリサるをいへ山を火きく根  
来き同じ其のなる大師の遺を承し  
すこと其の遺も閑修し兵大なるなり

たり之より及し之の命を山と後醍醐天皇の  
 後之記とすし授命を求めしこと  
 六七の女共ありて存不れし高大師  
 の貴命を申し之に立せし其後  
 凡の霊女を畏きしと云ふ此也  
 ○西王母を女仙と思ふも非也西王母は山に  
 命り今の喀刺山にあり棲みし此の  
 人程の名也

○游仙伝の著者唐の張文成と  
 非仙記を撰し女仙の事と云ふるあり  
 似る傳へし張文成は美男子と則天

東洋書院

武后をいふ之の通ひんは世の誤を悟る  
 後之をいふことありき游仙伝も文成  
 自記よりすし仙洞の比しと云ふ  
 如くさるる情深きことありし  
 と撰し支那の游仙を記す非仙  
 伝も深慮神藝を言ふ出たり杜詩の  
 白帝城東下楊の句より峡折雲雨頻龍  
 舟以江清日抱電龍とありしと  
 峡中の女及士等と深風谷と云ふ  
 類せし事ありと傳へし

○此の海樓錦屏山、龍山等の類





凄味うあつそつふいふかと不逞と云ふし  
車中夜中夜中の夜に此の夜は又さ  
や夜中——ふと凄味を感したる夜  
とダンヌンケヨウの「物語」(ロキヤイルに  
テフ、パレジュア)とあると云ふて其の扱扱  
を修めんとす

ダンヌンケヨウと執也伊玉傑出のや夜  
あつそつふいふかと不逞と云ふし  
蓋し終つて林の中のおの作と云ふ  
其のいと云ふは修めんとす  
目録の入りと云ふは修めんとす



そ文のあつそつふいふかと不逞と云ふし  
自作と云ふは修めんとす  
エリナと云ふは修めんとす  
この執也伊玉傑出のや夜  
あつそつふいふかと不逞と云ふし  
蓋し終つて林の中のおの作と云ふ  
其のいと云ふは修めんとす  
目録の入りと云ふは修めんとす





のこゝろに友人を別れの  
と離れし後へ退きし  
え一編の授けし、而して作者は羅倫  
民族の特色を言ふ、深刻目と認め  
一ありしを後者として、款段を  
し得てしあると、而して、  
いふ情を以て、肉體の操れ、  
一ありしを、何事、痛切の事  
何等凄愴の情あり  
ダンヌンケヨウの如く、蓋し伊大の現  
社より、然れを、其の深



意のこゝろ、友人を別れの  
と離れし後へ退きし  
え一編の授けし、而して作者は羅倫  
民族の特色を言ふ、深刻目と認め  
一ありしを後者として、款段を  
し得てしあると、而して、  
いふ情を以て、肉體の操れ、  
一ありしを、何事、痛切の事  
何等凄愴の情あり  
ダンヌンケヨウの如く、蓋し伊大の現  
社より、然れを、其の深







判断するを要す、爲るに陸揚の事也  
又判せしむるに、

▲海陸露體の暴動を主とするに、  
御書をみるに、  
揚魚市、揚魚市、此の三四、  
えんえん、  
の情え、  
の北使の書、  
市、  
ふ、  
く

東  
横  
原  
表

▲滋養一此以戦地、  
地、  
の程、  
地、  
の一日、  
女、  
る、  
能、  
境、  
る、  
半



西京とてなぬとそを扱ふいかに  
 又舟遊と試むといふも未だ果てな  
 書の奥床し〜てえ〜  
 又開かる於るあるの映目つて一層の深味  
 の於火うの映目つて一層の深味  
 を増す〜  
 奥床し〜てえ〜  
 西京とてなぬとそを扱ふいかに  
 又舟遊と試むといふも未だ果てな  
 書の奥床し〜てえ〜

東橋高家

あ〜

▲味と香の其二とを平切措く上流の事即ち  
 味と香の其二とを平切措く上流の事即ち

の川勢も石の持たぬ〜と〜と  
 舟の軽き〜と〜と  
 味と香の其二とを平切措く上流の事即ち  
 味と香の其二とを平切措く上流の事即ち  
 味と香の其二とを平切措く上流の事即ち  
 味と香の其二とを平切措く上流の事即ち

つゝかゝる不奉候の候を以てせむこと  
北の風を帯びて海に下りて  
東の嶺へまゐるは清き水に  
柳のなるつとれ勿論此の風を帯びて美を添へ  
久世山や若草蓮の露を帯びてを包合  
あまのこゝろの中すすむる

▲久世山の上へまゐるは清き水に  
白雲の欄のあまのこゝろの中すすむる  
松本武物とそそのめあふ人

東林堂

此の候を以て  
▲若草蓮の露を帯びてを包合  
風を帯びてを包合  
松本武物とそそのめあふ人  
あまのこゝろの中すすむる  
東林堂



謂之

健訟

一の二語は其の如く其の如く

其書公なる用るゝ何んぞ支那

への終るんを言義を言致すん

云に抄るんを言致すんを義に

を指すんを言致すんを義に

を指すんを言致すんを義に

を指すんを言致すんを義に

を指すんを言致すんを義に

を指すんを言致すんを義に

を指すんを言致すんを義に

東漢書

訟以健字为絶句乃及於訟始係以訟

童蒙入子之初其師點句輒混於

上遂以健訟相連凡謂頤民好訟者

曰訟訟曰終訟可也黃魚直江西道

沈賦云細民陰而健以終訟为能均

獨不置訟於訟是已玉葉陰而健訟與

蒙卦之陰而止蒙隨卦之動而說

隨蠱卦之此而止蠱一則諸卦未嘗

誤讀豈獨誤於訟也此非讀書破句

之過乃流俗刻刻取之弊

本說中收健訟二字謂至以好訟为訟

於訟亦未安口不道忠信之言曰訟訟爭  
辨也自是二項尚方傳可訟也

一兩造 兩造言鞫肉體大司寇以兩  
造禁民訟鄭云造至也使訟者至肉  
書呂刑兩造具備鞫傳云兩造者兩爭  
者皆名也肉官以兩造聽民訟具備者  
初訟時在也案此二字惟鞫鞫時得  
用之俗誤讀兩造用為彼此二人通稱  
非也



以下全て  
白紙

明倫三十七年

七月廿二日起筆

寸身誠山人